

年金分割で「離婚ラッシュ時代」到来!



熟年離婚「したい妻」を騙す

「夫の浮気調査」に
1500万円つきこんで...

「探偵」のあくどい手口

まさに嵐の前の静けさなのだろうか。

05年の我が国の婚姻件数71万組に対し、離婚件数は約26万組。3組に1組が破局し、なかでも熟年と言われる中高年の離婚が増えていく。同居20年以上の夫婦は02年に4万5536件と、85年に比べたら軽く2倍以上だ。しかし、03年からは漸減している。その理由は、来年4月1日から施行される年金改正法により、離婚

時の年金分割が始まること
が大きな要因とされている
のだ。

年金分割とは、第三号被
保険者（主に夫が社員の
専業主婦）が離婚時に、婚
姻期間中の厚生年金（報酬
比例部分）を夫婦間で最大
2分の1まで分割できると
いうものである。

さらに、来年は団塊世代
の定年退職も一斉に始まる。
つまり、「離婚したい」妻た
ちが、年金や退職金を目当
てに来年4月までウエーテ
ィングに入った、と見られ
ているのだ。

実際、こんな女たちの本
音も聞かれる。
「定年後、家でぶらぶらし
ている夫の面倒を見ると思

うとソツとします。子供も
巣立ったし、来年になったら
離婚して人生をリセット
したい」（50代主婦）

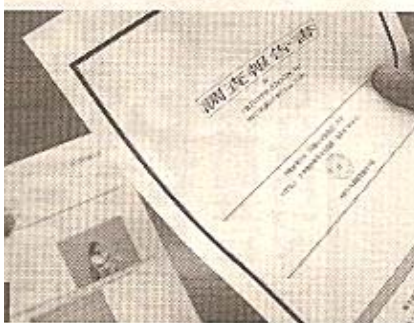
最近、探偵や興信所に夫
の浮気調査を依頼する妻も
増えている。離婚の際に証
拠をつかんで慰謝料を頂戴
しよう、というのである。
元探偵だった男性が、こん
な話をする。

「ほとんどが夫の浮気の証
拠ほしさに調査を頼む中高
年妻たちです。へそくりな
どを工面して、1000万
円近くつきこむことも珍し
くないんです」

ただ現実には、カネをか
けた割には思うような証拠
がつかめず、泣き寝入りす
る依頼者も多いという。こ
れから紹介する青山秀子さ
ん（仮名）も、そんな一人だ。

× × ×
青山さんは、東日本の大
都市近郊に住む。

「夫の愛人が憎くて、夫の
浮気調査に1500万円も
つきこんでしまいました」
そう告白する青山さんは、



探偵からの調査報告書。悪徳業者に引っかけると、100万円以上支払ったにもかかわらず、数枚のことも

40代とは思えない華奢な体にワンピースがよく似合う女性である。

結婚したのは22歳の時で二十数年になる。大学時代、アルバイト先の社員だった。年上の夫は頼もしく見えた。専業主婦となり、2人の娘にも恵まれ、幸せな日々だった、と振り返る。

そんな生活に陰りが見え始めたのは約5年前。夫の浮気が分かったのだ。相手は夫の職場の部下。問い詰めると、いともあっさりとかう言い放ったという。

「僕は彼女を愛している」同時に、夫の鉄拳が加わった。青山さんの肋骨にヒビが入った。「別れたい」と

思った。でも、一人で生きていく自信もない。ならば不倫の証拠を突きつけ、夫にも相手にも多額の慰謝料を請求しよう。そう考えたのである。

そんな時、あるタウン誌の広告が目にとまった。「女性探偵社」。自分で電話をする勇気はなく、いとこに連絡をとってもらおうと、受付の女性はこう言った。

「本人を出してください」青山さんは翌日、「女性探偵社」へ向く。受付の女性は優しく話した。

夫の素行調査を依頼すると、料金表を見せられる。1稼働(6時間)12万円。意外に安く感じられた。しかし、問題はオプション料金だった。愛人の住所調査に100万円、1泊2日の旅行追跡に100万円……。

「これも知らないよ、意味がないですよ」そう言われると断る気になれない。しまいに、

「早くして、お願い」ほどなく、愛人の住所は

判明したが、なぜか電話番号は記載されていない。追跡調査についても、「ちゃんとやっています」と、時々電話がかかってくる程度だった。夫と愛人が旅行に行ったり、ホテルの近くにいる写真も提示されたが、中には、何と妻である青山さんが夫と出かけた時に撮影されたものまで含まれていたという。

「おかしい」と思いつつ、「ここでやめたら、これまでの努力が無駄になる」と、愛人におとりの男性をつけ、別れさせる工作にも500万円をつぎこんでいた。し

判明したが、なぜか電話番号は記載されていない。追跡調査についても、「ちゃんとやっています」と、時々電話がかかってくる程度だった。夫と愛人が旅行に行ったり、ホテルの近くにいる写真も提示されたが、中には、何と妻である青山さんが夫と出かけた時に撮影されたものまで含まれていたという。

探偵選びは「慎重かつ恐れず」

今や青山さんのような詐欺欺まがいの探偵調査に泣き寝入りしている例は珍しいことではない。国民生活センターによると、探偵業や興信所に関する相談件数は全国で00年度が844件だったが、05年度には1658件へと倍増している。

「別れさせ」とは名ばかり、愛人がパチンコをしている時に男性を隣に座らせ、写真を撮っただけのものだったという。

結局、2年間の調査で露と消えた大枚は1500万円。青山さんの元に残ったのは、たった2冊の報告書ファイルと人間不信だった。「人の弱みにつけ込んで、ろくに調べてもいないことを、調べています」とウソをつかれ続けたんです。

青山さんは今、他人を信じられず、心療内科に通う。夫は現在も愛人とは切れない。

都消費生活総合センター。神奈川県藤沢市に本社を置く探偵会社「プライベート・シャドー」の坂井利行代表と同県鎌倉市の「オアシス」の板橋亨代表は、こう口をそろえる。

「仕事の9割は妻から依頼される夫の浮気調査です」実は、青山さんのような例は、悪徳探偵の常とう手段なのだという。坂井代表と板橋代表によると、悪徳業者の共通点は、以下の6点に集約される。

①派手に広告を出している
支社や電話番号がたくさん並んでいても、結局は転送で1カ所しかかかっていないことが多い。

②女性探偵をうたっている

実際、女性の探偵はほとんどいない。女性からの相談が多いので、安心させるために女性探偵社を名乗り、受付に女性を置いているだけ。また、受付の女性はブランドに詳しく、相談者の服装や持ち物をよく観察しているが、それは値踏みす

るためだ。

③「本人を出せ」と言う

冷静さを失っている当事者と話すことで、不当に調査費を支払わせようとしていることの表れ。まともな社は第三者でも構わない。

④オブションで値段が上がる 1稼働は1時間2万円ほど。これをもとに算出すれば、すぐに不当だと分かる。

⑤無意味な経過報告は、実際は調査していないことが多い証拠

⑥受付のある会社は俗に「元請け」と言われ、実際の探偵作業は「下請け」に安価で丸投げしている。「下請け」には、依頼者が「元請け」に支払った金額の1割ほどが流れるにすぎない。

結局、同一の探偵が追跡を続けるわけでもなく、相手の顔も覚えず、妻と愛人を間違えてカメラに収めてしまったりするのだ。

それだけではない。暴力団とのつながりを指摘するのは前出の元探偵だ。

「実は暴力団の探偵も多いんです。プライベートなところが暴力団に知れ、いつの間にか犯罪に巻き込まれてしまう恐れもあります」

監視や尾行を頼んだつもりが、逆に自分がそうされているかもしれない恐怖。社団法人「日本調査業協会」専務理事の上床忠さんは、こう話す。

「当協会の加盟員であれば、社員教育をしているから安心です。その上で何社かで見積もりを取り、比較してから契約書を交わすようにしてください」

また、来年6月から施行される予定の探偵業法により、探偵業は各都道府県の公安委員会に届け出義務が生じ、暴力団員も探偵業に携われなくなる。

「全国で5000〜6000あると言われる探偵会社や興信所の3分の1は消えるんじゃないでしょうか」(上床さん)

「そもそも資格も試験もなく、やりたいと思っただけでできるのが探偵」(坂井さん) だけに、むしろ施行前の現在は、最も危険な時期なのかもしれない。

駆け込みの「わか探偵」が巷にあふれている可能性だ。かと言つて、むやみに恐れる必要もない。探偵が集

依頼するなら、決意固めてから

また、夫婦問題など、さまざまな相談業務を行う「東京家族ラボ」(東京都豊島区) 主宰で「熟年離婚の損と得」(ワニブックス)の著者である池内ひろ美さんも、こう話す。

「慰謝料の相場は500万円。写真やメールなど証拠が多いことで金額が突然跳ね上がることはありませんが、証拠はないよりあったほうがいい。もちろん自分でも集めてください」

ただ、法律から税務まで広範囲な相談を請け負う「ファイナンスクリニック」(東京都品川区) 代表で「夫

めた証拠が離婚時の慰謝料請求で効力を発揮することもあり、証拠がなければ慰謝料は請求しにくいからだ。「夫と愛人がラブホテルの前に行ったり、手をつないでいる証拠写真で、慰謝料の請求に成功した妻はたくさんいます」(坂井さん)

と別れるときのお金の本「(河出書房新社)の著者である数本並里さんは、こんな忠告も忘れない。

「探偵に頼むのは、離婚の意思が固い人だけにしたほうがいいでしょう。どうしようか迷っている段階だと、逆に離婚の原因を作ってしまうこともありまうから……」

と、ここでくだんの青山さん、現在では夫と別居し、離婚を望んでいる、07年ウエーディング組なのだ。果たして来年、本当に熟年女性の離婚ラッシュは始まるのだろうか。

でしよう。実はどんなにお金をもらっても、一人で迎える老後の漠然とした不安がぬぐえない妻たちも多いいんです」(数本さん)

①夫婦間の財産を知る②結婚生活の経緯を書き出す③それぞれの年金受給額を知る④離婚後の生活イメージ(どこに、誰と住むかなど)を作る⑤自分がどれほど孤独に耐えられるかを知る

「この五つがクリアできないなら、熟年離婚はやめるのが賢明です」(池内さん)

昔から「結婚前は両目を開けて、結婚したら片目をつぶって」とはよく言ったもの。離婚に臨む際はもう一度、両目を開けて相手も周囲も、そして何より自分自身を見つめなければならぬ。

「そう簡単なものでもない」

本誌・菊地 香